

5・6 歳齡児の向社会的判断と自由遊び場面における行動

原田 亜沙美

【背景】向社会的行動は人間関係の形成や維持に有効に機能するとされており、集団で生きる人間にとって必要なものであると考えられる。向社会的行動は乳幼児期からみられ始めるが、他者と関わる中でより他者に視点を向けて行動できるようになっていく。幼児の社会的な場としては遊びがあり、遊びの中で育まれた社会的スキルはその後の対人関係にもつながっていく。したがって、幼児にとって遊びにおける他児とのかかわりは社会性を育むうえで重要であり、特に仲間との集団遊びは、幼児の共感性を育て、向社会的行動を促進させる場の一つとなりうる可能性が示唆されている（石橋，1999）。そこで本研究では、遊びにおける他児とのかかわりと向社会的判断との関連を明らかにすることを目的とした。また、向社会的判断と実際の向社会的行動について直接検討された研究はあまりなされていないため、向社会的判断と実際の向社会的行動との関連、向社会的行動と仲間関係との関連について検討することも目的とした。向社会的行動は実験場面で検討されることが多いが、本研究では自由遊び場面において観察することにより、児の実際の行動を明らかにできると考えた。

【方法】B 認定こども園の 5・6 歳齡児クラスに所属する 35 名（男児 22 名、女児 13 名）を対象とした。紙芝居による向社会的判断課題（援助場面と分与場面）を個別に実施し、協力児の向社会的判断を、理由づけを含めて検討した。また、自由遊び場面において、個体追跡サンプリングを用いて協力児 1 人あたり 20 分間観察を行い、遊びにおける社会的参加度、遊び行動の種類、向社会的行動を記録した。仲間関係の指標としては、スキャンサンプリングによる児の近接関係のデータから児の中心性を算出した。

【結果と考察】向社会的判断は大部分の児が向社会的な行動をとると判断し、理由づけとしては「事実・紋切り」が最も多かったが、「要求志向」、「共感的志向」を述べる児もいたことから、直感的に困っている相手を助けたいという気持ちを備えており、5・6 歳齡児は規範意識に基づいて行動判断を行う段階であるが、相手の気持ちをも含めて判断を行うようになってきている可能性が示唆された。また、遊びにおける社会的参加度と向社会的判断との間、特に、協同遊びと向社会的判断との関連がみられ、共通の目的を見いだしてコミュニケーションをとる、自分の気持ちをコントロールするなど、幼児の発達にとって必要な経験を多く含む協同遊びなどで他児と多くかかわることで、より相手の気持ちに目を向けることができるようになり、共感性が育まれる可能性が示唆された。実際の向社会的行動については、協力や物質的援助など物に関する行動が起きやすく、向社会的判断と一部の向社会的行動に関連がみられた。判断の理由として共感的志向を述べた児のほうが実際に向社会的行動を行いやすい傾向にあることが示され、向社会的行動の生起には共感が影響している可能性が示唆された。さらに、遊びにおける社会的参加度と分与場面の向社会的判断、そして実際の向社会的行動の 3 つに関連がみられ、遊びの中で他児と多くかかわることで共感性が育まれ、実際の向社会的行動が促進される可能性が示唆された。分与場面の判断においてのみこの関連がみられた理由としては、5・6 歳齡児では利己的分配から平等分配に変化していることで、分与の判断や「物質的援助」について変化がみられる時期であること、本研究の向社会的判断課題における分与場面が、児の向社会的判断をはかる指標として適切であったことが考えられる。本研究の結果から、幼児期において他者とのかかわりを持つ遊びの場を大切に、他者の気持ちに気づききっかけを得られるように支えることが向社会的性を育むために重要だと考えられる。（比較発達心理学）